

# ホスピスで

# きくということ

NPO法人きぼうのいえ 施設長  
山本雅基



東京の日雇い労働者の街、通称、山谷地区。山谷とは、台東区・荒川区の両方にまたがる簡易宿泊所（ドヤ）の密集地帯をいいます。このドヤ街に、身寄りや行き場がない人のための在宅ホスピスケア施設、「きぼうのいえ」があります。きぼうのいえでは、この世の最終コーナーを迎えつつある人たちの声や気持ちをいかに「きく」のか、そして「きく」ことの理念をいかにスタッフで共有しているのか、施設長の山本雅基さんにお話をうかがいました。

## 「きく」は、もっとも大切な仕事のひとつ

きぼうのいえのもっとも大切な仕事のひとつは、まさに「きく」ことです。スタッフは、きくことに多くの時間を割いています。

入居者さんの部屋をしばしば訪れては、その方たちの話を聞いています。ここでは、食事や散歩、入浴、消灯の時間を定めています。一日のスケジュールありきではなく、きいている途中で「トイレに行きたくなった」「お腹がすいた」と言われて介助したり、食事のお世話をする、という順番なのです。

痛みのコントロールや体の不具合に対して、医療や看護が入るのは原則中の原則。けれども、ここは医療ホスピスではなく、在宅ホスピスなので、安全管理の名のもとに医療的介入をした生き方や時間の過ごし方をしてもらうのではなく、入居者さんには、自分の「いえ」として過ごしていただきたいのです。だからここでは、転倒は「事故」ではなく「こけちゃった」。家族をいえてケアするときと同じ感覚なのです。

そして、大切にしていることは、入居者さんが最期のときを生き抜く日まで、その人と時間を共有して、その人の言葉をきくことだと思っんです。

# きく、ということ。

## きく人がいるからこそ語られる物語がある

きぼうのいえについて書かれた『大いなる看取り―山谷のホスピスで生きる人びと』（新潮社・中村智志著）という本があります。後書きの「きく人がいるからこそ語られる物語があるのではないか」といった一文があって、僕はその言葉にとっても共感しています。

山谷の人たちは、家族や友人などの縁を断ち切り、さまざまなことで破綻してきた人ばかり。そうした人たちが、人生の終末を迎えている今、何が必要なのでしょう。恨みつらみ、絶望、悲哀、孤独といった負の感情をひとつひとつ丁寧に紐解き、それらと「和解」していく作業なのだと思います。

人に語ることは、自分の生きてきた人生を回顧することにつながります。回顧する過程でさまざまな気づきがあって、恨んできた世間との和解、無作法をし続けてきた自分との和解、禍根のあった家族との和解をしながら、切り離された絆や関係性が回復されていく。もう一歩踏み込んで、神のような大きな存在と和解し、自分がこの世に命を授かったことに感謝する人もいます。

きぼうのいえでは、和解の過程を完了させていく人がとても多い。だからここには、亡くなる間際になって「死にたくない」という人がいません。人生における「ドリル」を解き切ったので、次のステップに進める（この世での人生を終わりにできる）ということなのでしょう。

## チームワークとユーモアで「きく」

お話すると簡単なようですが、きぼうのいえでの「きく」という仕事は、スタッフが力を合わせて硬くて暗いトンネルを少しずつ掘り進んできたようなものです。実際に、入居者さんの抱える「どろどろした重いもの」を引き受けるのは容易なことではありません。

人は優しくされることによって愛されていることを実感し、自分の存在価値を見出しますが、痛めつけられ人間不信に陥っている入居者さんたち

は、いかに人を傷つけ、その心を破壊することができるかによって、自分の存在価値を確かめようとする人が多いのです。

それを乗り切ってきたのは、チームワークとユーモア。入居者さんに傷つけられたり、難題を突きつけられても、チームで取り組むと、メンバーの誰かから「それは、こうしたらいいじゃん」というせりふが出てくる。こうして、だんだん知恵が堆積され、ユーモアのあるかわし方を覚えていく。

たとえば、葉をわたすと「病気を治してオレの内臓を売るんだろう」と言う。すると、こちらはこう答える。「そんな肝臓じゃ売れないよ」。「お前なんか自殺してしまえ！」と言われれば「自殺とは自分で死を選ぶこと。あなたにしろと言われても、それは自殺にならないからしません！」「胸を触らせろ」という要求に対しては「今日、おっぱい家に置いてきちゃったの」。「ここはきぼうのいえなんかじゃない、失望のいえだ」と言われたときは「絶望のいえ」じゃないだけ良かったよね。すると、少しの沈黙のあと、笑いが起こる。そんなことを繰り返すうちに、入居者さんが語り始め、僕たちは耳を傾けることができるのです。



きぼうのいえに入ると、美しい花々に迎えられた。

## 僕たちは「弱さ」を共有するグループ

スタッフは、決して心の強い人たちではありません。むしろ、弱い。重い前科のある人が来ると聞いておびえることもあれば、入居者さんと同じくらい苦しんだり、つらい思いをしてここにたどり着いた人もいます。「私、実は〇〇なの」とスタッフの誰かが自分の弱みをさらすと、「私も」「僕も」ということがよくあります。僕たちは、弱さにおいて連帯しているグループといってもいいかもしれません。

チームのなかで、いちばん弱いのは僕でしょう。子どものころは『ドラえもん』に出てくるのび太くんタイプで、ジャイアン風の子によくいじめられていました。ものごとをまともに受けてしまうタイプなので、前職では「うつ」がもとで辞めた。きぼうのいえを建てても、入居者さんの邪気にやられて軽いうつになったり、パニック障害を起こして救急車で運ばれたり、抑うつ神経症で布団から出られなくなったこともありました。

文化放送の「大竹まこと ゴールデンラジオ！」という番組に出演したときには、大竹さんにこんなことを言われました。「無一文の人が、ある女性の虎の子の1000万円に目をつけて結婚して、そのお金でホームレスのホスピスをつくったなんてばかなこと言っている。そうしたら、お金や支援が寄せられてきた。愚者の周りに賢者が群れをなして集まっている」。愚者である僕が施設長を続けてこられたのは、やはりチームワークのおかげです。

弱さを共有するグループは、お互いの傷を舐め合っているわけではありません。聖書にも「私は弱いからこそ強いのです」という言葉がありますが、弱さと弱さでつなぎあつた手は、かえって強く結ばれると思います。

## 向かい合って相手と時間をわかちあうこと

話を「きく」ことに戻しましょう。ここでの「きく」ということは、ただ相槌をうったり、「それで、それで？」などと、話を促すのとは違います。そんなことをしたら、完全に拒絶されてしまう。

きぼうのいえには、牧師や僧侶の方にも来ていただいています。入居者さんの希望がないかぎり神仏の話をしないようにお願いしています。話をするのではなく、入居者さんの話をきいてほしいからです。そのときに、入居者さんが語ろうとせず、沈黙が続いてもいいのです。向かい合って相手と時間をわかちあう、それも「きく」ことのひとつだと思っからです。そして、相手から自然に言葉が流れてきたら受け止めればいい。



礼拝堂に掲げられた遺影の数々。どの人も、幸せな人生を送ってきたような穏やかな顔をしているが「遺品から見つけた写真などを見ると、ものすごく人相が悪かったりするんですよ」と山本さんは笑う。「入居者さんのそれぞれの人生には深いストーリーがあって、書き起こしたら分厚い本にできてしまう」とも。

# きく、ということ。



清潔感と温かみのある、きぼうのいえの外観。山田洋次監督の映画『おとうと』は、きぼうのいえがモデルになっている。「映画のように、人が寄り添い“腕の中で”亡くなってゆく人がここではとても多い」と山本さん。



## 山本 雅基 (やまもと・まさき)

「きぼうのいえ」施設長。  
1963年生まれ。1985年、日航機墜落事故のニュースに接したことをきっかけに聖職者を志し、1995年上智大学神学部を卒業。卒業後、「NPO法人ファミリーハウス」の事務局長を務める。2001年、「ホームレスのためにホスピスを建てたい」と考え、看護師の妻とともに活動を開始。妻の貯金を元手に銀行から借金をし、全国のキリスト教会や、多数のボランティアの後援を得て、2002年4月、緊急一時保護施設「なかよしハウス」(全11室11床)を開設。2002年10月、在宅ホスピスケア対応型集合住宅「きぼうのいえ」を開設。

急一時保護施設「なかよしハウス」(全11室11床)を開設。2002年10月、在宅ホスピスケア対応型集合住宅「きぼうのいえ」を開設。

## NPO法人 きぼうのいえ

〒111-0022 台東区清川2丁目29番12号  
TEL : 03-3875-7523 FAX : 03-3875-7525  
E-Mail : kibounoie777@mbm.nifty.com  
URL : <http://www.kibounoie.info/>  
敷地面積 : 110.32m<sup>2</sup>  
延床面積 : 433.36m<sup>2</sup>  
階 数 : 地上4階  
部屋数 : 21室 (21床)、1室4.7畳 7.8m<sup>2</sup>

取材・文・撮影／秋池智子(編集部)

入居者さんに対してすることがないと判断したとき、お坊さんはトイレの床だけ掃除して帰ってしまうこともあります。宗教関係以外でも、きぼうのいえにはさまざまな技術やキャリアを持つ方がボランティアをしたいと訪れるけれど、その能力を生かしているかというところがでもない。まず、能力よりも「素のつきあい」と「人間力」が問われるからです。「来たからには、自分の能力を生かして何かしなくては！」というまじめなタイプの人には、まずそれを壊すことから始めていただきます。

きぼうのいえには「サービスの標準化」という考えはありません。病院や施設では特定の人に優しくすることはできませんが、ここでは無理する必要はなく、スペシャルフレンドをつくってもらうことで担当が自然に決まります。また、僕らはルールやマニュアルをできるかぎりつくらない。そのよくわからない「ぐにやぐにやした感じ」を「きぼうのいえスライム理論」と言っています。ここでは、ファジーがスタンダードです。その気持ち悪さに耐えられないとここではダメ。理念というか、団体としての背骨がきちんと通っていれば、ファジーなほうが入居者さんの話をききやすい。

## 「きく」は人生の目撃者になること

きぼうのいえは、マザー・テレサの「死を待つ人の家」とよく比較されるし、僕も「死を待つ人の家の日本版」などと表現しています。「マザー・テレサと生きる」(監督／千葉茂樹)という映画でも後半にきぼうのいえが出てきます。ただ、ここは「死に向かうときを過ごす場」ではなく、「いのちを生き抜く人の家」。生き直し、人との関係を結び直して最期を迎えるいえでありたいと思います。そのために「おもてなしのシャワー」を浴びせ、さまざまな方法で愛情を注ぎます。

苦難や恨みに満ちた人生を送ってきた入居者さんたちが語り始め、自らの人生を振り返り、和解を重ねて変わっていく。心を閉ざしていた人が、ある日ふと「怒るのはもう疲れました」と言ったり、「ありがとう」「この人はみんな優しいねえ」と口にする。僕たちのできることは、その変わっていく過程を見守ること。「きく」ということは、その人の人生の目撃者になることだと思えます。